

【ニュージーランド滞在記】

ニュージーランド紀行～シャクナゲを求めて

宮本 忠 （前ニュージーランド研究所長・三重大学名誉教授、PhD）

宮本由紀子（三重オーストラリア・ニュージーランド協会理事）

草の根交流を求めて

三重オーストラリア・ニュージーランド協会は、20世紀ぎりぎりの1999年（平成11年）5月7日に設立されました。本協会が、ニュージーランドと友好関係団体を設立した契機の一つは次のようでした。三重県と奈良県を結ぶ大杉谷・大台ヶ原（オオダイガハラ）登山道とニュージーランド南島のミルフォードトラックとの姉妹登山道締結の話が個人的に、三重県関係者から、僕に寄せられたことがきっかけになりました。当協会の主要事業として、ニュージーランド及びオーストラリアのありのままの姿に接するために、両国への「草の根交流」が必要であると考えました。その具体化の一つが「両国への親善交流旅行」でした。第一弾は2001年7月29日から8月6日に、オーストラリアのカウラ（ニューサウスウェルズ州）において開催された全国オーストラリア・日本協会連合会設立大会参加でした。その主たる目的は、当時、日本には、オーストラリアおよびニュージーランドに関する友好団体が多数存在していたものの、自主・独立の団体で、統一的な連合会といった組織はありませんでした。この点は、両国とも同じでした。その先頭をきってオーストラリアが連合会を設立するというので、ぜひ見ておきたいと考えたのです。カウラには、太平洋戦争捕虜収容所がありました。旧日本兵も収容されていました。旧日本兵の集団脱走事件が、第二捕虜収容所で1944年8月5日の未明に起き、その日本兵の多くが射殺されるという悲劇がありました。カウラ市民有志が墓を作り、それを今も吊っているのです。その現場は、日本とオーストラリア友好の原点にすべきところであると思いました。大会後、参加者の一部はタスマニア・州都ホバートを訪問しました。それ以来、オーストラリアとニュージーランドを当協会は、親善交流旅行として毎年隔年ごとに訪問しています。昨2013年のニュージーランド訪問で合計12回となりました。

親善旅行の基本

私たちの訪問旅行は、飛行機以外、原則として、訪問先やツアーコース、宿泊施設、レンタカーなどを自分たちで企画、手配、実施することを旨としています。普通行なわれるような首長表敬訪問や公式パーティーは他の団体にお任せすることにし、「草の根主義」と「皮膚感覚」で旅することに重点を置いています。

第一回ニュージーランド訪問

ニュージーランドへの第1回の親善交流の旅は2002年10月2日から13日までの期間でした。8名参加のシャクナゲ・ドライブ旅行でした。ニュージーランド最大の都市圏人口120万人を擁する南緯37度00分、東経174度47分のオークランド国際空港に到着陸。空港ビル内のレンタカー事務所で保険などの手続を完了してレンタカーのキーを預かりました。日本で予約済みでしたのでスムーズに、ことが運びました。空港から国道1号線のモーターウエー（自動車専用道路）へもスムーズに入ることができました。日本同様、自動車は左側通行なので心強い。南下して、北島オークランドから、南島クィーンズタウンを経由し、氷河で有名なミルフォード・サウンドまでシャクナゲドライブをしようという作戦です。

西洋シャクナゲ

かつて、僕がリンカーン大学で客員教授をさせていただいていたとき、ニュージーランドのあちこちに見事なシャクナゲが見られ、そのシャクナゲは日本のものとかかなり趣きが違っているように感じていました。機会を見て一度じっくり観察したいものだと考えていました。

ニュージーランドのシャクナゲは西洋シャクナゲといわれ、高山に自生する日本シャクナゲまたは和シャクナゲとは区別されているようです。日本ではシャクナゲの花を‘せいそ’とか、‘そそとした’花と表現されるのに対しニュージーランドの花は、大きく、花の色は多彩でカラフルです。‘色あざやか’で‘ハデ’、‘自己主張的’などと表現されることもあります。木も日本では通常、山地において、低木であるのに対して、うんと大木で花は大輪です。平地でも普通に見られます。花にも国民性が反映されるのでしょうか。シャクナゲがツツジ属の亜属であることをこの旅で学びました。

ニュージーランド北島西海岸に面する、南緯39度17分、東経174度03分のタラナキでは、ガーデン・フェスティバル（庭園祭）、シャクナゲ祭が行なわれます。タラナキは、タスマン海と標高2518mのタラナキ山が織り成す自然豊かな地形に位置しています。

2013年のシャクナゲ祭は、11月1日から10日まで開催されたようです。この時期がタラナキ地方のシャクナゲの見頃なのでしょう。タラナキにはすばらしい庭園がそろっており、年に一度シャクナゲ祭が開かれるようです。そこではタラナキ地方に生育されている多様な品種の見事なシャクナゲが展示されているとのことでした。残念ながら今回のドライブ旅行では訪問する時間をつくることができませんでした。なお、南島の南緯45度52分、東経170度30分のダニーデンのシャクナゲ祭は、10月中頃から11月始めに開催されたようですので、その頃がダニーデンのシャクナゲの見ごろのようです。

いずれも、シャクナゲ祭は、‘春を告げる’あるいは‘春を彩る’催しになっています。機会を見て訪ねたいものです。

ニュージーランドのシャクナゲは、西欧、とりわけイギリスにおいて改良されたいわゆる西洋シャクナゲです。移民した人々が植栽したと思われます。イギリスへは、特に19世紀にプランツハンター（植物狩人）によって、主に中国原産のシャクナゲがもたらされたようです。外来動植物は、しばしば嫌われものにされますが、シャクナゲはウエルカム、歓迎ということでしょう。プランツハンターとは、西欧において、17世紀から20世紀中期にかけて、食料、香料、薬品、繊維などに利用された植物や観賞用植物の新種を求めて世界中を探検、冒険した人たちのことです。

オークランド国際空港から国道1号線を、晴天の下、快適に車は走ります。追い抜いて行く車はときにあるが、車の数は多くありません。大小の丘に緑の牧場と白い羊が点々。この風景がまさしくニュージーランドの風景です。しかし最近、軽く暖かい肌触りのいい化学繊維が普及したためか、この風景が見られなくなりつつあるようで、さびしい思いがします。ガソリンスタンドも公衆電話ボックスも道路沿いにありません。民家もまたほとんど見られません。空港をでてから約1時間。目もだんだん風景になじんできました。

ここらで朝食を兼ねた休憩。ようやく出会ったカフェテリアに元気よく入場。前日、シンガポール国際空港で乗換え、夜間飛行だったのにみんなはしゃいでいます。英会話の出来る者も、苦手な者も見事に注文。こちらスタイルで腹ごしらえができました。

ワイカト地方の中心都市の南緯37度47分、東経175度17分のハミルトンを横目で見ながら通過。ハミルトンの都市圏人口は約19万人。ニュージーランドでは第4に大きい都市。オークランドから130km。ハミルトン都市部をアツというまに過ぎ、再びのどかなニュージーランド的風景を見ながら車内おしゃべりがはずみます。

温泉都市ロトルア

南緯38度07分、東経176度19分のロトルア市は、市域人口約6万6千人の温泉観光都市。環太平洋火山帯の上に位置しています。オークランドから234km。先住民マオリの歴史・文化の漂う都市です。大分県別府市と1987（昭和62）年に姉妹都市提携しています。ここには日本人が経営する温泉モーターがあります。通常、ニュージーランドの温泉は、男女混浴で、水着着用することになっています。ロトルアのこのモーターは日本式で、男女別の裸の付き合いでした。

街には、別府と同様、温泉池から、硫黄の臭いをさせて白い湯煙が上がっています。温泉池の中では、これまた別府と同様、ブク、グツ、ブクと大小の泥坊主が沸きあがっています。遠い昔の高校の修学旅行を、忠は懐かしく思い出しました。メンバーの一人が卵を紐につるして温泉池に入れました。温泉卵が出来ました。プーンと温泉の香りの漂う中で食べた卵を忘れることができません。ロトルア周辺にはたくさん湖があります。

別の機会でしたが、その内の一つに案内されました。フライパン湖でした。この湖は、世界で一番広い表面積をもつ温泉湖だそうです。何とその湖の水面から白い湯気が立ち上っていたのです。その周囲の山道の小川からも山から滴り落ちるお湯からもまた湯煙が上がっていましたよ。このとき、地球が燃えている。「火の球」であることを実感し驚嘆しました。飛行機に乗って上空1万mを飛んでいるときいつも僕は思うのです。

「人は空気がなければ生存できない、飛行機も酸素のある地球表面を飛んでいるに過ぎない。水中でも生きることは不可能。大宇宙からすれば、僕はほんのわずかな空気空間に閉じ込められて息をしている」。そしてさらに僕は思うのです。別府やロトルアに来ると、「地中でも、火の中、激烈な高温、低温でも生きられない」。

ロトルアのあるこの地方には、熱水系の実感できる珍しい地熱地帯があります。これと関連して、100m以上も吹き上がる間欠泉もあります。私たちが間欠泉を見学に行ったときの出来事です。東京の女子高生の一団がにぎやかに入ってきました。可愛そうにも彼女たちは間欠泉を見ることができなかった。せつかく吹き上げる間欠泉を見るために来たのだらうに。

「時間です。集合して次の見学場所に移動します。急いでくださ〜い」とガイドのおねえさんに追い立てられて一団が去りました。その直後、大きな音響を立てて間欠泉が高く高く青空に向かって吹き上がりました。間欠泉とフライパン湖は地下の熱水系が同じだといえます。

ロトルア市街の住宅街や公園の庭や垣根にも、シャクナゲの木が、大きな真紅や真っ白の大輪を所狭しと咲かせているのに度肝をぬかれました。民家の宅地は一般に広いので、大きな木の垣根もさまになっています。

「公園の大木のしゃくなげ、庭先の色とりどりのしゃくなげ、変化もあって、写真の被写体にはことかかないわ」と由紀子は感嘆しました。

北島西海岸タラナキ地方の中心都市は、南緯39度、東経174度のニュープリマス(New Plymouth)です。ロトルアから約185kmです。ニュープリマスは、オークランドと首都ウエリントンとのほぼ中間にある興味深い海岸都市です。タスマン海とタスマン半島を背景に長いサーフィン海岸道路が続いているそうです。これと並んで注目されるのが、シャクナゲ祭です。ニュープリマスには見事な公園や庭園が多くあり、春になると、あちこちにシャクナゲやツツジが咲き、花であふれるといわれます。とはいえ、ロトルアからかなり離れており、今回はこれもまたパスしました。

当店はネクタイで

北島から南島へは、フェリーで移動する手はずです。北島の乗船港は首都ウエリントンです。ロトルアからウエリントンの距離は約375kmです。ロトルアを朝出発し、ウエリントン港近くのレストハウスに夕方前に到着しました。ウエリントンは南緯41度17分、

東経174度46分の位置にあります。南島の到着港は南緯41度、東経174度のピクトンです。ウエリントンとピクトンとの間のクック海峡を、3～4時間で渡航する船旅です。北島のドライブ旅行の最後の日であり、首都ウエリントンに敬意を表して、「たまには高級レストランで夕食をとろう」とそれなりのレストランにドライブ姿で行きました。ドアには規律正しいドアボーイがいて、「当レストランでは背広、ネクタイの着用、お願いしています」と丁重に断られました。

ニュージーランド的合理主義

今ではレンタカーの利用にかなり慣れてきましたが、このときもいい勉強になりました。フェリーに乗船の前日、念のため、港に出かけ、レンタカーの扱いについて問題が起こらぬように、下調べをしました。レンタカーはウエリントン港にある駐車場に返し、そして下船するピクトンのレンタカー事務所で再び借りることになっていました。この点がいまひとつわかりませんでした。確かめておきたかったのです。出港の朝、ルンルン気分でモーターを出ました。余裕をもって出かけました。ところが駐車場には係員も誰も見当たりません。キーを入れる返却用の箱がただポツンと置いてあるのみでした。こういう場面はニュージーランドでときどき出くわすことは慣れてくるとだんだんわかってきます。初めのうちは面食らったものです。僕は、こういう事態を「ニュージーランドの応用問題」あるいは「ニュージーランド的合理主義」と呼んでいます。人口の少ないこの国の人々が案出した「アイデア」であると考えています。

夏時間騒動

首都ウエリントンに到着。バーカンシー（空き室有り）と表示してあるモーターに行けば、受付が案内してくれます。気にいればそこのお世話になります。これが僕たち流のやり方です。8名という大人数だったので、オーストラリアのどこの都市にでもあるビクターズ インフォメーション センターを利用しました。ここでは宿の予約をはじめ、種々の町の情報をえることができるので安心です。4泊目にやっと8名が同じ屋根の下で休むことができました。このレストハウスは、1、2階は外階段で通じていました。私たちは1階です。安普請なのか、2階の人があるくとミシミシ音がする。おしっこはチョロチョロ、用を足した後はジャーと水洗の響き。夜中の音は大きい。一人約3千円で泊めてくれるのだから。我慢、我慢。疲れていたのか直ぐに眠りに入ったが、夜半2階が妙に騒がしい。眠れなくなった。朝、聞いてみると、「ピーピーと警告音が鳴りだした。どうにも止まらない。大騒ぎになってしまった。借りてきた携帯電話なのです。バッテリー切れでした」と。

そんなとき由紀子が突然言い出した。「きょうは10月の第一日曜日、夏時間が始まるん

じゃないの」。

「そうだ。ここに来る前に、日本でそんなことを言っていた。時計が一時間早くなる。これはえらいこっちゃ」。今朝8時にウエリントン港からフェリーで南島のピクトンに渡らなければならない。その前にレンタカーを港事務所に返却しなければならない。少なくとも6時に起きなければ間に合わない。夏時間が始まるかどうか確かめていない。間違ってみんなを起したら袋叩きになってしまう。

忠は、愛用の携帯ラジオをイヤホンで一所懸命に聴く。3時になっても4時になっても時報がない。トーキング番組がペチャクチャ話しているのだが、時報も夏時間のことも言わないように思えた。うつらうつら聞いていたので、あるいは話していたのかもしれないが。ようやくラジオから、

「只今5時です」というメッセージが飛び込みました。自分の時計で確認してやっと思いでみんなを叩き起しました。

南半球の初春の10月の夏時間開始の朝7時のウエリントン港はどんよりと曇っていました。うす暗く冷たい。フェリー発着場は誰もいない。私たち8名以外は。朝食も取らずに港に来たのに。木製の腰かけがやけに固く冷える。おばさんが掃き掃除をしていたので、「8時の高速フェリーでピクトンに行くのだけれど誰もいない。どうしたんだろう」と訊ねたら、

「海が荒れているから出ないんじゃない。私にはわからないけれど」と冷たい返事。

突如煙草で喉を痛めたような声でハンドマイクのおねえさんが怒鳴りだしました。

「8時出港予定のピクトン行き的高速船は、海が荒れているため欠航です。乗船予定のお客様は9時半発の船に乗り換える手続きをしてください」「アーアー」、急におなかがすいてきました。

鷗に送られて

結局、私たちが乗船予定していた高速船は、荒波のため休船となり、普通のフェリーで南島のピクトンに渡ることになりました。飛行機の場合と同じで、ボデーチェック、荷物検査を終え、荷物を預けました。乗船手続き完了。かなり大きな船で、レストランなどもある。ゆっくり出航する船に荒波がドスン、ドスンと船体にぶつかりましたが、愉快でした。にぎやかな鷗が、高い波を避けているのか、餌を求めてか、それとも私たち日本人を歓迎してか、フェリーのほんの近くまでガアガア鳴きながら飛んできました。

南島に上陸

ピクトンは南島の最北端。南緯41度、東経174度に位置します。南島の北の海の玄関口であり、空港もあり、鉄道の終着駅もあります。南・北島交通の要路です。

鉄道の駅前には土産店などがあり、見事なシャクナゲの垣根もありました。しかしここはニュージーランド。かつてはピクトンに一時、ニュージーランドの首都が置かれたこともあったようですが、現在は、人口3000人ほどの静かな町です。マルボロー地方に属しており、近くに南島を代表する葡萄、ワインの生産地があります。今回はそれに目をつぶり、南島を南下、国道1号線をひたすら走ることにしました。鯨ホエールズウォッチングや、海岸の遊歩道に寝そべるオットセイなど野生動物と人の共生（トモイキ）の町カイコウラも、横目で見流しました。ときに道路沿いにあるシャクナゲが、100kmのスピードでたちまち「うしろ」に去って行きました。

一路、南島最大の都市圏人口40万人を擁する、クライストチャーチに向かう。そこに、すでに何度かお世話になっているモーテルを、今晚の‘お休みどころ’に予定しているからです。薄暮が迫る頃、到着しました。クライストチャーチには、その中心街のすぐ近くに超特大のハグレー公園があります。クライストチャーチでは、ハグレー公園を含む街全体に広がって、2月から3月にかけて、例年、‘International flowers Show(世界花まつり)’が大々的に展開されます。世界から多くの人々が参集します。しかし今回は10月であり、目的も異なるのでクライストチャーチは一泊だけにしました。クライストチャーチのフラワーショーは別の機会に見学しましたが、ここではこれ以上触れません。

ミルフォードを目指したが

きょうは、国道一号線をさらに南下して、クインズタウンを基地に、ミルフォードサウンドを目指します。ミルフォード辺りのシャクナゲを追わんとするものです。ミルフォードサウンドは、南島南西部のフィヨルドランド国立公園の一部を構成しています。サウンドとは、タスマン海から内陸へ約15km続いているサウンド(入り江・小湾)の総称です。1200m以上の断崖絶壁に囲まれ、絶壁には鬱蒼と多雨林が茂っているようです。その下の海にはアザラシやイルカ、ペンギンが見られるところです。私どものレンタカーでどこまで行けるかわかりませんが、行けるところまで行き道すがらシャクナゲにお目にかかろうという計画です。

晴天のドライブ日和が続いています。ときに国道沿いに植栽されているシャクナゲ観賞を重点におく気楽なドライブ旅行です。南緯43度51分、東経172度65分のクライストチャーチから南緯45度01分東経168度39分のクインズタウンまでは、約480kmあります。時速100kmで、寄り道せずに走っても5時間はかかります。道路事情のよい国道を突っ走るならば、私たちでも5時間でクインズタウンに行くことは可能だろうと思います。それも、また「楽しからずや」です。「当然」というべきか、私たちはそのような選択はとりませんでした。

シャクナゲや羊のいる牧場で写真を撮ったり、散策したり、また、途中でパンや‘フィッシュ・アンド・チップス’などを買って野外昼食する自由な旅です。道すがら、地方の

人たちと雑談することも楽しみの一つです。クインズタウンのモーテルに到着したのは、夕暮れでした。クインズタウンは、人口1万7千人ほどの‘リゾート タウン’であり、‘アルペンの拠点’です。

私たち夫婦は、忠の勤務先の都合でその翌日みんなと別れ、日本に帰ることが出発前から予定されていました。

エッ、道路が不通！

翌朝、この旅行の慣例で、一つの部屋に全員が集まって、すでにマーケットで買ってある食材を当番で調理し、朝食をいただき、当日のミーティングをしました。そして、「それでは気をつけて、ミルフォードのシャクナゲの旅の成功を祈っています」と、私たち夫婦はミルフォード組をモーテルで見送りました。

私たちがタクシーでクインズタウン空港まで行く途中、気さくな運転手さんからとんでもない仰天するニュースを聞きました。

「あなたたちの友達ミルフォード・サウンドに行けないよ。途中で山崩れがあり、道路が遮断されている。俺はさっきそこから引き返してきたところだ」。

「明日は通行できるかな、大丈夫かな？」とびっくりして聞いた。

「それは無理だろう。どうなるか俺にはわからないよ」と運転手さん。

ミルフォードへ行く山道が土砂崩壊で通行止めだというのは。仲間はどうしただろう。せっかくの楽しみにしていたミルフォード・サウンドとシャクナゲの旅ができなくなってしまった。当時は、まだ携帯電話は普及していなかった。ほとんど人通りもない山道。連絡方法もわからない。

「このタクシーで応援に行こうか」とつぶやく。

「行ってどうする？どうしようもないよ。6人もいることだし、何とかなるだろう。もどればいい。クインズタウンには見所がたくさんある」と運転手さん。

心配しながら、予定通り私たちは、国内便でオークランド空港に飛び、国際線に乗換え日本に帰った。

かれらの帰国後、次のような話を聞いてやっと安堵することができました。

「途中で何回か緊急の立て看板のようなものがあつたが、それを無視して行けるところまで行こうと、どんどん車を走らせた。そして、ついに、道路が土砂崩れで遮断されているところに突き当たった。通行が出来ないように道路にバリケードが出来ていた。それ以上車を進めることができなくなった。クインズタウンに引き返し、休憩した後、クインズタウン周辺を観光したよ」。